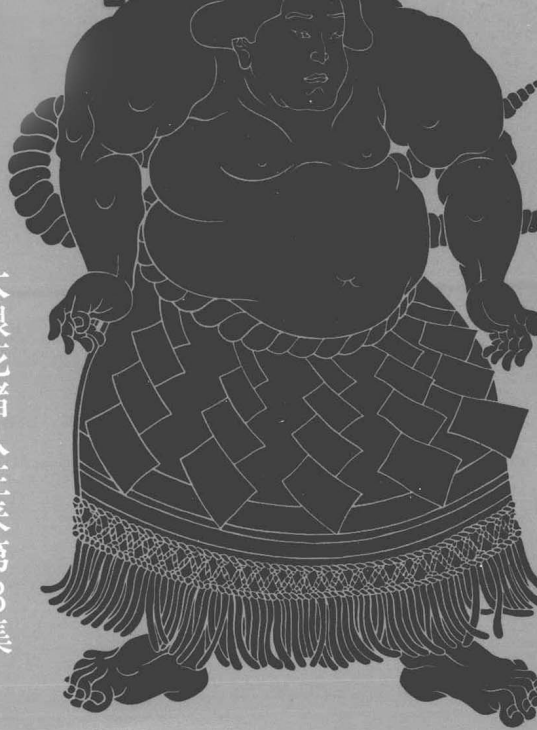


大浪花諸人往来第3集

不知^{しらぬ}火^いの化粧^{しずめ}まわし

有明夏夫





大浪花諸人往来第3集

火の化粧まわし

夏夫

角川書店





しらぬい
不知火の化粧まわし
——大浪花諸人往来第3集——
1981年9月30日 初版発行

著 者 有 明 夏 夫

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話 03(265)7111(大代表) 〒102

振替 東京3-195208

大日本印刷・宮田製本

Printed in Japan 0093-872317-0946(0)

©Natsuo Ariake

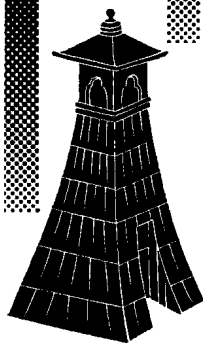
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

灯台の光	三
不知火 ^{しらぬい} の化粧まわし	六
浪花富士の計画	一〇七
印度からきた猿	一六七

装丁
玉井ヒロテル

灯台の光



I

講釈師樽堂春岳の『赤穂義士伝・赤垣源藏徳利の別れ』が終わった。

大変な熱演だった。春岳が重々しく一礼すると、額からは汗がしたたり落ちた。彼がハリボテの三尺口から姿を消しても、客席の中ですぐさま動きだす者はいなかった。

海坊主の親方こと赤岩源藏は、ことに酔った一人だろう。とにかく、赤垣源藏とは一字しか違わないのだから、親近感を抱くのは当然である。まるで、己れが赤穂浪士の一員になったような心地だった。

「さあさあ親方、一杯いきまひよいや」

隣にいた近所の貸本屋が、源藏に茶碗を差し出して、徳利を近づけてきた。

「お、こらえらいすんまへんな」

恐縮しつつも、遠慮せずに源藏は酒を受けた。そして鯛を肴にチビリチビリやるうち、春岳、小春岳、春佐の三人も姿を見せて、ささやかな酒宴となった。

ここは天満天神社の境内にある花菱亭、講釈の定席である。時は明治十一年師走初めの夜、季節の割には暖かい。『柳生二階堂』の春佐、『難波戦記』の小春岳はどちらもうまく読んだが、やはり年の瀬ともなれば、せめて一晚なりと春岳の『赤穂義士伝』を聴いておきたい気になる。車座になって酒を飲んでる連中は、そんな男ばかりだった。

「師匠——」

と、貸本屋が春岳に言った。「春海はんはまだ戻ってきまへんのか？」

「へえ、まだでおます。そうおめおめと顔出しはでけまへんやろ」

師匠の返事はまことにそつけない。

「いま、神戸の開港場にいるとか聞いたでえ——」

と、これは郵便配達夫。流石に耳が早い。

「そこで何しとんのん？」

源蔵が訊くと、

「そら、講釈だんがな。小さな席でやつとるとかいいう噂だつせ」

「その噂なら、わても聞いとります」

春岳は静かに言った。「こつちへ戻つてきたいのは山々だつしやろけどな、甘やかしたら癖になるよつてに、ほつたらかしにしてまんねん」

「もうそろそろ堪忍したんなはれ。春海はんがおらんと、やつぱり淋しいがな」
貸本屋の意見には、源蔵も同感だった。

「いや、そうはいきまへん。人の道に背いた者を、そうそう簡単に赦しとつたんでは、世間さまに申しわけがたちまへん」

律義な春岳は何度も小刻みに首を振った。

しかし、その世間さまのほうは、とつくに春海を許している。源蔵や貸本屋たちだけではなく、花菱亭の常連は、みんな春海の帰参を待っている。彼の『太閤記』が再開される日を、いつのことかと愉しみにしている。

樽堂春海は『太閤記』しか読まない講釈師である。しかもこれを読む時は、必ず徳川家康を罵倒するので有名だった。このため、旧幕中は合計二十七回も糸屋町の牢屋にぶちこまれている。東町奉行

所の御抱え手廻りだった源蔵も、お役目上やむなく八回か九回春海を引つ立てた記憶がある。

もつとも、引つ立てたとはいふものの、他の咎人とはまるで異なる扱いだった。奉行所の与力や同心たちには、本気で春海を吟味するつもりなど毛頭なく、公儀と奉行の手前そういう形を整えたに過ぎない。もし春海を獄門にかけでもしたら、浪花の地には打ち毀しが起きただろう。

牢屋に入っても、春海は楽をしていたようである。とにかく顔と名を知られた彼が入ってゆくと、牢名主はすぐさま己れの坐っていた場所を明け渡して、一席やってくれと懇望したものだという。だから、春海は牢の内外を問わずに『太閤記』を読み続けてきたわけだ。

ところが、御一新後にはこの禁制が解けて、もう狸親爺をいくら罵つても構わぬようになった。目出度いことである。さぞかし、当人は喜ぶかと思いきや、これが逆だった。

張り合いがのうなつてしもた、というのである。源蔵には芸人の心意気など解るわけもないが、頭を抑えつける者がいなくなると、かえって遣る気は失せるものらしい。そしてその遣る気を、あらぬ方角で發揮し始めた。

女狂いに走つたのだった。相手が娘であろが他人の女房であろが、もうまるで見境なく、すぐに手に手を取つて駆け落ちしてしまふ。まず大抵は、女に愛想尽かしてをされて戻ってくるのだが、そのうち、また別の女と姿を消す。

駆け落ちで有名な男には、いま一人歌舞伎役者の嵐徳三郎がいる。するとお節介なことに、あいつには負けるな、とけしかける者が現われる。「春徳の争い」はどちらが勝つかで、結構巷の評判を集めていた。

しょっちゅう駆け落ちを繰り返しているの、ここ数年春海の『太閤記』は完結したことがない。普通この講釈は三百六十席、正月に始まって年末に終わる。従つて貸本屋の言うように、来年の頭か

ら春海の講釈を聴くためには、いまが引き戻す絶好の時機だろう。

しかし師匠の春岳は、まだ赦す気にはなれないらしい。いずれは誰かが中に入って、取りなそうとするだろうが、もう少し様子を見るほうがよさそうだった。

「親方——」

花菱亭の親爺がそばへ来て耳打ちした。

「なんや？」

「京屋はんがお見えだすわ」

「わしに用事？」

「へえ」

「ほんなら、ここへ来たらええやないか」

「それが、ちょっと内緒の話らしおまんねや」

「ふーん、なんやろな？」

源蔵は茶碗を置いて、やおら腰を上げた。

京屋忠兵衛は、八軒屋で宿屋を営んでいる。源蔵と幼馴染みではあるが、こんな夜分にわざわざ講釈の席亭までたずねてくるのは、かなり面妖な振舞である。何の用事か、まったく見当がつかなかった。

忠兵衛は名看板の下に突っ立っていた。

「お愉しみのところを、えらいすんまへんな」

「いや、それはかめへんねん、もう講釈も済んだよってにな——それより、用事でなんや？」

「へえ、いま内藤さんがうちへ来たはりまんねん」

「内藤さんて、あの新撰組の内藤さんか？」

「そうだす」

「ほう、そら珍しやないか。一目会いたいな」

「ほな、これからうちへ来てくらはりまつか」

「行く行く」

源藏は引き返さずに、そのまま表へ出た。

「わては人力車に乗ってきましたよってに、親方はこれで行っとくなはれ」

「おまはんはどないすねん？」

「途中で擱まえまっさ」

「それぐらいなら、一緒に行こや。歩いたかてしれとる」

「いや、内藤さんは親方に頼みごとがある、言うたはるさかい、先に行っとくれやす。わては、す

ぐあとから追いかけます」

「そうか——ほな、そないさしてもらおか」

待っていた車夫は、源藏が乗り込むと丁寧に毛布をかけて、すぐに走りだした。やはり師走である、

頬に当たる風は皮膚を貫くようだった。

2

内藤与三郎とは、懐かしい名前である。

源藏は長らく東町奉行所の御抱え手廻りを勤めていたが、新撰組との付き合いはあまりない。近づ

こうとも思わなかつた。狼藉を働くしか能のない連中が多かつたからだ。

第一、局長の近藤勇が嫌いだつた。卑怯な男で、徒党を組まずには人を斬れなかつたし、蛤御門の変の折などは、いつも御所の石垣の蔭にかくれていて、前を通りかかる者がいると、うしろから拔身を浴びせていたという。ことに、名与力として名の高かつた内山彦次郎を、些細な私怨にかられて暗殺したことは、いまなお赦せぬと思う。

局長がそういう男だから、下の連中がいい加減だつたのは当然だろう。彼等のために泣かされた庶民は、大坂だけでも数知れない。その中にあって、内藤与三郎はものの道理を弁えた侍だつた。

そう数多くは遭つていない。新撰組は京屋を定宿にしていたので、忠兵衛に用事があつて訪れた時に、顔を合わせた程度である。それでも、さっぱりした気性の持主らしいことは判つた。もし、平穩無事な時代に出会つたのであれば、長い付き合ひになつていただろう。

京屋に着くと、女中はすぐに源蔵を離れの間へと案内した。与三郎の頭はもちろんザンギリになつていたが、その下の顔は昔のままだつた。

「お久しぶりであります」

「おう、元氣そうだな」

「いやあ、もうあきまへん。齡だすわ——旦那さんこそ、ええ色艶したはりまつしやんか」

「うむ、身体だけは達者だ」

与三郎の目つきや口許は、以前よりも柔和になつたようである。

「旦那さんはいま、どこにお住まいだんねん？」

「籍は東京だがな、しばらく京都におつた——」

意外なことに、与三郎は警視庁に奉職していた。それが西南戦争で長らく鹿児島にあり、その

のちは京都で戦後の処理に当たっていたのだった。

「さよか——それはそれはごくろはんでござりました」

私服なので、階級は判らなかつた。それをよっぽど訊こうとして、源蔵は危うく言葉を呑み込んだ。新撰組にいた者が、新政府の中で出世する筈はないからである。

それからのしばらくは世間話。どちらにも初耳の話題は多いから、びっくりしたりさせたりするうちに酒肴が出て、やがて帰宅した忠兵衛も座に加わった。

「さて——」

与三郎は忠兵衛の顔を見て言った。「例の件だが、多少は話してくれたのか？」

「いいえ、まだしとりまへん——わての口で言うよりも、旦那さんから御説明願うたほうがええと存じまして」

「うむ、それもそうだな——」

と顔向きを変えて、与三郎は口調を改めた。「源蔵。おまえはおこうを憶えているだろう」

「おこう？」

源蔵は首をひねった。突然そう切りだされても、何のことやら判らない。

「孝子だがな。御幸太夫」

と、横から忠兵衛。

「ああ、あのおこうかいな」

それなら憶えている。曾根崎新地に出ていた妓で、ものすごい別嬪だった。近藤勇が惚れ込んで身受けしたが、その折に奔走したのが忠兵衛である。

「いま、あの女は神戸にいるらしい」

「へえ、また神戸だったか？」

思わず口に出た。

「また、とはどういう意味だ？」

「いえいえ、別の知り合いが神戸におる、と聞いたもんだっさかいな——」

樽堂春海の名前を出してもはじまらないので、与三郎に話の先を促した。

御一新後十一年も経つと、人の運命はさまざまな変転を見せている。与三郎の物語った一部始終は、源蔵が初めて耳にする事柄ばかりだった。

二月前、京都の南禅寺で与三郎は一人の女に遭った。

孝子の姉の正子である。こちらは深雪太夫の名で、大坂の新町に出ていた。源蔵も名前ぐらいは知っている。姉妹とも、近藤勇の囲われ者になった、と聞いたことはあるが、幕府瓦解後の消息までは知らない。

正子は、八幡の大地主のもとへ、後妻として嫁いていた。そして与三郎に頼むには、妹と近藤さんとの間に出来たお勇が、いまは祇園で舞妓になつてゐるらしい、そこで手許に引き取りたいと思うが、夫はお人好しなのでそんな談判は手に余る、まことに申しわけないが先方と掛け合つてもらえまいかとのこと。気の毒に思つた与三郎は、すぐに祇園の茶屋へと赴き、難なく取り戻してやつた。お勇は父親に瓜二つだが、己れの身の上については何も知らず、諄々と聞かせてやつても、よく解せぬ風だった。しかし、まあ、伯母とは血の繋がった間柄である、二人で暮らしてゆけば、追々情愛も湧いてくるだろう。

問題は孝子である。神戸の開港場で働いている、と一度便りがあつたきりで、その後はとんと消息を伝えてこない。真偽のほどは定かでないが、暗い稼業に堕ちてしまった、との噂も耳にする。もし

それが本当なら、ぜひとも捜しだして、親子と一緒に暮らせるように計ってやりたい、と言うのだった。

「なあるほど——ほんで、その御用をこのわてに？」

「そういうことだ。時間さえあれば、私が捜しに行ってもいいのだが、今度東京へ帰らねばならんことになつてな」

「さよか」

「旦那さんのおっしゃるには——」

横から忠兵衛が遠慮勝ちに口を挟んだ。「神戸の警察に頼んでも、相手が新撰組局長の女とあつては、さほど熱を入れてはくれるまい」

「そらそや。おざなりの探索しかしてくれへんやろ」

「というて、わてが開港場へ行つてみたところで、お役に立てそうにはおまへんしな」

「うむ、あこはガラが悪いよつてに、素人にはちよつと無理やろなあ」

源蔵と忠兵衛がそう話していると、

「その点、おまえなら警察よりも下情に通じておろうし、こういう仕事を頼むには、うつつけの人物と見込んだ次第なのだ」

与三郎がかぶせるように言つた。

「へえ——」

源蔵は瞬時考えた。彼は近藤勇が嫌いだった。もし、勇についての御用なら断わるが、捜す相手は孝子である。しかも、彼女が出ていたのは曾根崎新地である。御一新の前後を通じて、源蔵の縄張り（なまきり）に属していた場所である。従つて孝子は身内も同然、これを放つておいては、源蔵の男がすたるだろ

う。

「どうだっしゃろなあ——親方、お引き受け願えまへんやろか？」

忠兵衛にすれば、孝子は子も同然である。頼む声は、まさに親のものだった。

「よろしおま——うまいこといくかどうかは判りまへんけど、いっぺん神戸へ行つてきまひよ」

「それは有難い。よしなに頼む」

与三郎は几帳面きちめんに頭を下げ、当座の費用に、と懐ふところから五十円を取り出した。

「旦那さん、こないにようけは要りまへんわ。この半分でも多過ぎまんがな」

「いやいや、この仕事には、どれだけの手間がかかるか、知れたものではない——それに、有り過ぎて困ることもなからう」

「それはそうだっけどな、もし見つけたせなんだら、えらいこっちゃ」

「別にあかなんだとしても、返済してくれと言いはせん——どうせその金は深雪太夫のところから出たものだ。先方は素封家そほうかゆえ、遠慮する必要はない」

「さやか——ほな、一応お預かりしときまっさ」

それからあとは、再び世間話。どちらの歳月にもさまざまな起伏があったから、いくらしゃべっても尽きるところがない。いまとなれば、生命の危機にさらされたことも、芝居的一幕である。三人はしたたかに飲んで語り合った。

「源藏、おまえには渾名あだながあつたな、あれはなんと言った？」

かなり酔った与三郎は、思い出したように訊いた。

「えっへっへ、海坊主の親方、と呼ばれとります」

「なるほど、言い得て妙だの」

元治元年の夏、天誅組の殘党を討つために、源藏は河内へと狩り出されたが、この折相手の中に滅法腕の立つ侍がいて、左の耳を削ぎ落とされた。もともといかつい面相の上に、新たに傷瘍の凄味が加わって、彼はちよいと名の売れた親方になった。断髪した頭を左うしろから眺めると、ただもうノッペラボウなだけなので、海坊主に擬されたわけだが、なに吐かしやがる、と腹を立てたのも大昔のこと、近頃ではむしろ好都合だと思ふ場合が多い。神戸でどんな奴に出食わそうと、まず貫禄負けはしない筈である。

「それで、いまのおまえは、警察とどういう関係にある？」

「そうおっしゃられると困りまんねや——まあ、関係あるよなないよな関係、としか申し上げようおまへんわ」

明治初頭、源藏は捕亡下頭として治安の一端を預かっていた。これは五年ほどで御役御免となったものの、縁だけは切れていないから、現在の警察署へも大きな顔で入ってゆける。そこを頼って、時々厄介な事件を持ち込む者が現われるのだが、生来動きまわる仕事が大好きな性分なので、つい深入りするのが常だった。

「そいつはいい。まさにうってつけではないか」

与三郎は上機嫌で頷いた。その様子に付け入るつもりはないが、源藏はふと尋ねてみる気になった。「えらい失礼でおまつけど、旦那さんはいま、どの辺までいったはりまんねん？」

「どの辺とは、どういう意味だ？」

「いや、あの、警視庁のほうでどんな——そらもう当然警部さんにはなったはりまっしゃろが、何等ぐらいまでいったはんのか、ちゅうことすわ」

「わっはっはっは——元新撰組の平同志が、偉うなるわけなكارう。一番下の十等だ」